

Main Text (The essay must be 1 page in English or Japanese)

Essay Title: COVID-19 made me stay in Hokkaido

Topic Num.:

大学へ入学するずっと前から、私の夢は『都会で暮らすこと』であった。東京や大阪などの、いわゆる大都会で就職し、生活をするに漠然とした憧れがあった。私が北海道の田舎町で20年間育ってきたということもあるだろう。それに加え、都会には最先端のIT技術が集まっている。情報系の進路に進みたかった昔の私にはやはり都会での生活が輝いて見えた。しかし北海道を離れ、首都圏で生活をしたかった一番の理由は「親元を離れたい」という気持ちがあったためであった。大学に入学し一人暮らしを始めたものの、1か月に何度も私の様子を見に来る親にイライラしていた。私は反抗期の真っ只中だったのだ。

一般的に反抗期というのは中学生頃から高校を卒業するあたりまで続き、さらに女性は男性よりも早く始まり早く終わると言われている。私の場合中学2年生からつい最近まで続いていた。私の反抗期はとても長かったと思う。母子家庭だったこともあり生活は豊かとは言えなかった。それでも私に不自由をさせないために毎日働き、私が大学へ進学したいと言った時も背中を押してくれた母にはとても感謝していた。していたけれど、どこへ行くにも私を心配し、受験や成績に関して逐一口うるさく言う母には嫌気がさしていた。私が一人娘だからだろう。私が大学生になってもそれは変わらず、毎日連絡をしてきては私の家に来ようとしていた。私だって週末は友人と遊んだりしたいのに。もう子供じゃないのに。そんなことばかり考えていた。いつしか私はアルバイトや部活が忙しいと嘘をつき、母を遠ざけるようになった。実家には長期休みに数日帰る程度で、ろくに帰省もしなかった。

私の心境が変化したのは今年の3月であった。新型コロナウイルスの感染範囲が瞬く間に拡大し、猛威を振るっていた。北海道も感染拡大の例外ではなかったものの、私の住む地域にも地元にも感染者が出ていなかったため、春休みということで帰省の準備をしていた。すると母から1本の電話がかかってきた。突然電話をかけてくることなど滅多にないために、少し嫌な予感を感じていた。電話越しの母は咳き込みながら、「お母さん、コロナにかかったかもしれない。帰って来るのはもう少し後にしてほしい。」と言った。そのまま母の話を聞いていると、数日前から咳が止まらなくなり、微熱もあるという。寝ようとしてもむせてしまい、寝るに寝られないという状況だった。かかりつけの病院へ行ったが、予約診察のみなどで診てもらうことができず、他にも数件回り、やっと診察してもらえ病院を見つけた。するとコロナウイルスかどうかは五分五分だと判断された。私が帰省する直前だったこともあり、母は念のためPCR検査をお願いしたが、医師には検査を断られてしまった。理由はわからない。泣く泣く母は帰宅し、安静にする他なかった。この時私は「母が苦しんでいるのにどうして」という気持ちでいっぱいになった。とても悲しく、同時に腹立たしくなった。たとえ有効な薬が無かったとしても、自分の免疫力に頼るしかないとしても、母と向き合っていたらよかった。母は働きづめの毎日を送っていたため、免疫力が高いとは言い難い。私はすぐに実家へ帰ろうとした。しかし母に止められてしまった。私は母が心配で眠れず、すぐに連絡が返ってこないときは不安で押しつぶされそうになった。その時に気がついた。母のことがどれ程大好きだったのか、いかに自分の中で大切な存在だったのかを。結果、母は数日安静にしていたら回復した。季節の変わり目ということで風邪を引いたのだろう。心の底から安堵した。

それから私は積極的に母と連絡を取るようになった。レポートでいい評価をもらえた、久しぶりに友達と会ったなど、他愛もない話をしている。そして私は、「北海道で就職したい」と思うようになった。都会への憧れがなくなったわけではない。しかしできるだけ母の近くで生活したいと思っている。今までは就職先として関東圏の企業を調べていたが、道内企業に焦点を当てるようになった。この夏私は道内企業のインターンシップに参加し、豊かな自然に囲まれながら仕事ができるという環境がやはり私には合っているのだと感じた。

私は今まで以上に家族の絆を大切にしながら、生まれ育った北海道にこれからも残り、IT産業に貢献していきたいと考えている。新型コロナウイルスは私たちの日常を一瞬で奪った恐ろしい存在だ。しかし私はこの憎むべき感染症により家族の大切さを教えられ、自分の進路を見つめなおすきっかけになったのだ。